

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370894

研究課題名(和文)コーカサス新石器文化の起源：中石器遺跡の検討

研究課題名(英文)Origin of the Neolithic culture in the Caucasus: Research on the Mesolithic sites

研究代表者

有村 誠 (Arimura, Makoto)

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：90450212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、コーカサスにおける新石器文化の起源を探求するために、新石器文化に先行すると考えられる中石器(完新世初頭)遺跡の文化内容を検討することを目的とした。そのために主としてアルメニアにおいて中石器遺跡を発見するための踏査と発見された遺跡の試掘調査を行った。その結果、前6800年頃のレルナゴグ遺跡を発見し、さらに同遺跡の試掘調査によって、中石器遺跡と新石器遺跡との間には石器製作において大きな違いがあることが明らかとなった。現段階では、中石器集団と新石器集団との間に物質文化の上で繋がりが確認できないことから、中石器集団を前6千年紀の新石器集団の起源に位置づけられないと結論付けた。

研究成果の概要(英文)：This research aims to understand the Neolithisation process in the Caucasus by examining the Mesolithic sites which preceded the Neolithic sites known as 'Aratashen-Shulaveri-Shomutepe'. We first carried out archaeological surveys to discover the Mesolithic sites and then conducted trial soundings on them. These methods yielded significant results. First, a Mesolithic site, Lernagog, dating back to ca. 6800 BC, was found near Armavir, which is located on the border between the Ararat plain and the mountainous area. Second, the analysis of the lithics found in Lernagog revealed that there was a significant difference in the lithic tradition between Lernagog and the Neolithic sites in the Ararat plain. At present, no obvious links in the material culture between the Mesolithic and the Neolithic sites, and therefore it concluded that the Mesolithic group was not an origin of the Neolithic group which appeared in the Ararat plain in 6th millennium BC.

研究分野：考古学

キーワード：新石器化 中石器 コーカサス アルメニア ジョージア 農耕牧畜の起源

### 1. 研究開始当初の背景

西アジアは人類史上初めて農耕牧畜に依存する生産経済が成立した地である。近年の調査により、農耕牧畜は西アジア内のいくつかの地域で発生し、それらは地域色をもちながら、周辺地域へと波及していったことが明らかになりつつある。現在、西アジア各地で農耕牧畜の受容過程(新石器化)を明らかにする調査が進められている。

西アジアの北端に位置するコーカサス地域では、新石器化について未だ明らかでない部分が多い。特に周辺地域と比べて、いつ、どのような集団が農耕牧畜という新たな生業を開始したのかという新石器化の初期段階が不明である。その大きな原因の1つは、現在のところコーカサス地域最古の新石器文化であるアラタシェン・シュラベリ・シヨムテベ文化(前6000-前5200年)に先行する中石器文化(あるいは完新世初頭の文化)の様相が十分に解明されていない点にある。中石器文化から新石器文化への移行過程を解明することが、コーカサス地域の新石器化の理解に繋がるのである。

### 2. 研究の目的

本研究は、前6千年紀の新石器文化に先行する中石器文化の内容を解明することを目的とする。これにより、コーカサスにおける新石器化の初期段階を考察するデータを得ることができ、さらには西アジアにおける農耕の起源や拡散に関する問題に寄与することが期待される。

### 3. 研究の方法

以下の3つの方法によって研究を遂行した。

#### (1) 過去の調査の検討

ソビエト時代から2000年代初頭までに調査された中石器文化と思われる遺跡出土の考古資料を検討した。これは、中石器文化の大まかな特徴を理解することが目的である。対象としたのはジョージアの国立博物館とアルメニアの考古民族学研究所の収蔵資料である。

#### (2) 遺跡の分布調査

新たに中石器遺跡を発見するために考古遺跡の踏査を行った。踏査の対象とした地域は、ジョージア南部のパラヴァニ湖周辺とアルメニア西部のアラガツ山南麓である。

#### (3) 中石器遺跡の試掘調査

上記の分布調査で確認した遺跡の中から、中石器文化に帰属する可能性がある遺跡を選び、試掘調査を実施した。その後、試掘調査で得られた遺物の分析を進めることで中石器遺跡の文化内容を解明することを試みた。

### 4. 研究成果

#### (1) 過去の調査の検討(図1)

完新世初頭(前10000-6000年)の考古学研究は、ソビエト時代のジョージアにおいて進展がみられた。特にジョージア西部においてダルクベティ(Darkveti)を初めとするいくつかの洞窟遺跡の発掘が行われ、中石器文化あるいは初期新石器文化といわれる無土器文化層が報告された。それらの文化層から出土した石器群を検討すると、在地のフリントを用いた石刃・細石刃を中心とする石器インダストリーが主体であること、また、台形や不等辺三角形の幾何学型細石器が道具石器の中で多数を占めたことなどが石器群の特徴として把握できた。こうした特徴は、2000年代初頭に発掘されたコティアス・クルデ(Kotias Klde 前10000-8000年頃)においても確認されており、完新世初頭のジョージアには、石刃インダストリーと幾何学型細石器を特徴とする中石器文化が存在していたと理解される。ただし、ダルクベティとコティアス・クルデの間には違いもみられた。例えば、押圧剥離技術による石刃製作や家畜動物の存在の可能性などはダルクベティで確認されたが、コティアス・クルデにはみられない。おそらく2遺跡間の時期差と推測されるがさらなる検討が必要である。



図1 2000年代初頭までに調査された遺跡

アルメニアでは21世紀に至るまで、中石器遺跡(あるいは完新世初頭遺跡)は皆無であった。アルメニアの中石器文化研究の嚆矢は、カムロ(Kmlo)遺跡の発掘調査である。アラガツ山の東部、カサク川沿いの渓谷に位置するこの洞窟遺跡からは、多数の黒曜石石器と動物骨が出土した。黒曜石石器にはカムロ・ツール(Kmlo tool)と我々が名付けた側縁に急角度の二次加工が施された独特な石器が数多く含まれていた。C14年代によれば、同遺跡の完新世初頭の層は複数の時期に分けられ、居住期間はおよそ前10000から7000年頃であったと考えられる。

カムロ遺跡の動物骨の分析は、当該時期の家畜の有無を知るうえで極めて重要であるが、残念ながら未だに十分な研究が行われていない。

カムロ遺跡の発見以後、アルメニアの山岳地帯でカムロ・ツールを出土した遺跡が次々に発見されたことから、同石器がアルメ

ニアの中石器文化の示準遺物である可能性が高くなった。

以上のように過去の調査を検討したところ、コーカサスの完新世初頭の編年案が提示できた(図2)。これによれば、完新世初頭は大きく2つの文化段階に分けて考えることができる。今後はフィールド調査によって、この編年案を実際に検討する必要がある。

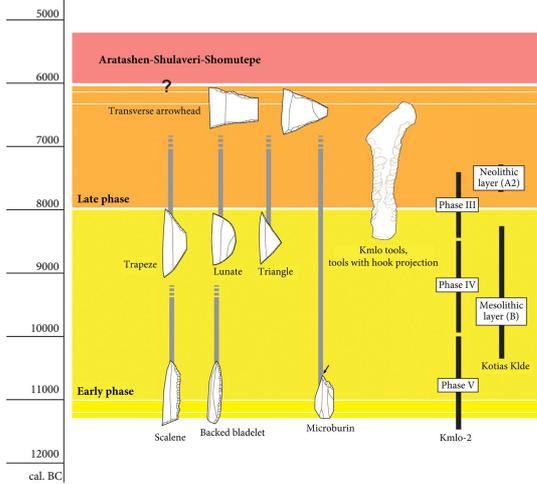


図2 コーカサスの完新世初頭の編年案

### (2) 遺跡の分布調査

ジョージアのパラヴァニ湖周辺は、ソビエト時代の調査により先史時代の遺跡が複数報告されていた地域であった。特にパラヴァニ岩陰遺跡は中石器または初期新石器文化の遺跡の可能性が高いといわれていたが、試掘調査の結果、後期旧石器時代の遺跡であることが判明した。加えて、パラヴァニ湖周辺で踏査を実施したが、完新世初頭に位置づけられる遺跡を発見できなかった。そこで以降は、アルメニアの調査に集中することとした。

アルメニアではアラガツ山南麓のアラガツオツン地域で踏査を実施した。アラガツ山南麓は、アララト盆地の北部に位置し、盆地と山岳地帯の境に位置する。

この地域を踏査の対象としたのには理由がある。これまでの調査により、アルメニアにおいては2つの文化の分布に違いがみられることが明らかとなっていた。前6千年紀の新石器文化(アラタシェン・シュラベリ・ショムテペ文化)の遺跡は、アララト低地(標高850m)にのみ分布がみられた。それに対して、中石器文化(完新世初頭)の遺跡は、丘陵・山岳地帯(標高1000~2000m)に位置していた。両文化には顕著な立地の違いがあり、さらには、新石器文化の遺跡がテル型の集落遺跡であるのに対し、中石器文化の遺跡は、概して小規模な洞窟・岩陰遺跡であるという遺跡形態にも違いがみられた。両文化の関係性を探るには、両者の環境が接するアララト盆地周辺の丘陵地帯(標高900-1000m)に立地する遺跡を調査する必要があると考えたことから、アラガツオツン地域を踏査対象地域とした。

踏査の結果、旧石器時代から中世に至る多

種多様な遺跡を約60カ所発見することができた。人類の活動領域として当該地域のポテンシャルが高いことが窺える。一方、既知の考古遺跡と比較できない遺跡もいくつか発見されており、これらの遺跡については今後さらなる検討が必要である。中石器文化に帰属すると考えられるカム口・ツールを含む黒曜石器が採集できた遺跡は数カ所あった(図3)。そのうち、レルナゴグ(Lernagog)遺跡とノラヴァン(Noravan)遺跡の2カ所で試掘調査を行うこととした。

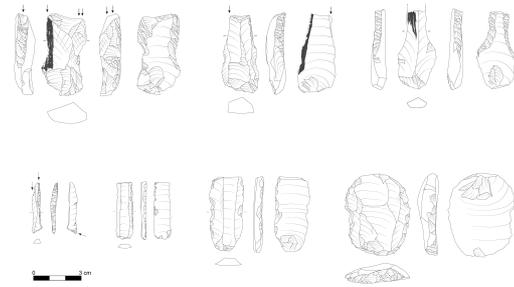


図3 アラガツオツン地域表採石器

### (3) 中石器遺跡の試掘調査

レルナゴグ遺跡とノラヴァン遺跡において試掘調査を行った。試掘の結果、レルナゴグ遺跡は前7千年紀前半、ノラヴァン遺跡は前5千年紀後半頃の遺跡であることが推定された。本研究の成果として特筆すべきは、レルナゴグ遺跡の発見である。前7千年紀前半、つまり既知の新石器遺跡に先行する中石器遺跡(完新世初頭)がはじめてアラガツオツン地域で発見されたのである。レルナゴグ遺跡からは黒曜石器、動物骨、炭化物などが発見された。黒曜石器にはカム口・ツール、押圧剥離石刃、細石器などが含まれており、上述したカム口遺跡の石器組成と類似する。こうした石器組成がアルメニアの中石器文化の特徴であることが再確認された。一方でこれら中石器遺跡の石器の特徴は、アララト盆地の新石器遺跡のそれとは大きく異なる。現段階では、石器製作伝統において中石器文化と新石器文化の差異は大きいと考えている。

### (4) まとめ

本研究の重要な成果として、次の3点が挙げられる。第1は、前6800年ごろのレルナゴグ遺跡の発見により、中石器遺跡が新石器遺跡の分布するアララト盆地の北の境まで広がっていたことが確認されたことである(図4)。中石器文化とアララト盆地の新石器文化はそれぞれの活動領域が重なっていた可能性がある。例えば、レルナゴグ遺跡の上流には、黒曜石の一大産地であるアレニ山が存在し、この産地の黒曜石は中石器・新石器文化の両集団で利用されていたことが判明している。従来、中石器集団と新石器集団は居住域や活動域が異なっていたと想

定していた。しかし、レルナゴグ遺跡に発見により中石器集団はアララト盆地の周辺にまで活動域を広げていたことが明らかになった。

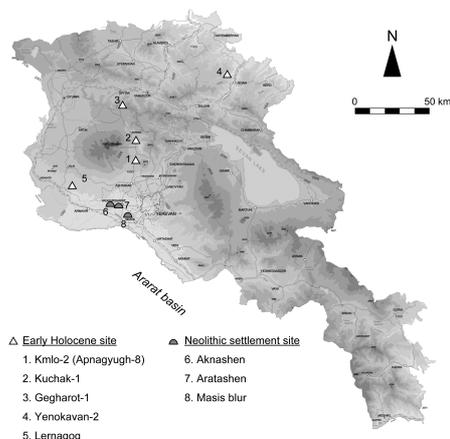


図4 中石器遺跡と新石器遺跡の分布

第2は、中石器遺跡の石器製作がアララト盆地の新石器文化と本質的に異なると確認されたことである。石器製作の伝統上は両集団には共通点がありません。

第3は、本研究の課題とは離れるが、アラガツオン地域には、未知の遺跡が数多く眠っていることが明らかになったことである。中でも、銅石器時代と思われる複室構造の石積み建築遺構や時期が定かでない大規模な「カイト・サイト」は、未知のコーカサス先史文化の側面を表している可能性があり今後調査すべき遺跡である。

最後に現段階における中石器集団と新石器集団との関係を考えてみたい。上記のように、レルナゴグ遺跡の発見により、中石器集団と新石器集団の活動領域は一部とはいえ重なっていることが確認できた。このことから、中石器集団がアララト盆地の新石器集団へと変容したことを想定できるであろうか。現時点では、中石器集団と新石器集団との繋がりを出す物質文化の証拠は少ない。特に、先に述べたように、石器製作伝統は両集団において顕著な違いをみせている。今後の資料の増加をまたねばならないが、中石器集団が新石器集団へ変容した可能性は低いと考えている。

一方、今後、中石器文化の全容を解明するには、動植物遺存体が良く保存された遺跡の発掘調査が鍵となる。現在のところ、レルナゴグ遺跡から出土した動物遺存体は極めて少なく、同遺跡の生業体系を復元するには至っていない。中石器文化における農耕牧畜の有無を検討することは、コーカサスの新石器化を考えるうえで最も重要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

1. C. Chataigner, M. Arimura, R. Badalyan, G. Palumbi, Neolithic and Chalcolithic in Armenia: New Data. In *International Symposium on East Anatolia-South Caucasus Cultures: Proceedings II*, 2015, pp. 2-15 (査読無)
2. C. Chataigner, R. Badalyan and M. Arimura, The Neolithic of the Caucasus. *Oxford Handbooks Online*, 2014, pp. 1-25 (査読有). DOI: 10.1093/oxfordhb/9780199935413.013.13
3. A. Petrosyan, M. Arimura, B. Gasparyan, S. Nahapetyan and C. Chataigner, Early Holocene sites of the Republic of Armenia: Questions of cultural distribution and chronology. In *Stone Age of Armenia*, 2014, pp. 135-159 (査読有).
4. M. Arimura, B. Gasparyan, S. Nahapetyan and R. Pinhasi, Forest exploitation during the Holocene in the Aghstev Valley, northeast Armenia. In *Stone Age of Armenia*, 2014, pp. 261-281 (査読有).
5. B. Gasparyan and M. Arimura, Study of the Stone Age in the Republic of Armenia. Achievements and perspectives. In *Stone Age of Armenia*, 2014, pp. 13-33 (査読無).

〔学会発表〕(計7件)

1. M. Arimura, Early Holocene in Armenia: Synthesis of recent archaeological works. *8th International Conference on PPN Chipped and Ground Stone*, 23 November 2016, University of Nicosia (キプロス)
2. 有村誠「コーカサスにおける中石器文化 - アルメニアにおける考古学調査 (2015)」『第23回西アジア発掘調査報告会』2016年3月26日、サンシャイン集会室
3. 有村誠「アラガツ山南麓の完新世初頭遺跡の研究」『日本西アジア考古学会第20回総会・大会』2015年6月14日、名古屋大学東山キャンパス 野依記念学術交流館
4. 有村 誠・藤井 純夫「コーカサスの新石器時代前夜を探る - アルメニア、グルジアにおける考古学調査(2014年) - 」『第22回西アジア発掘調査報告会』2015年3月21日、サンシャイン集会室
5. 有村誠「南コーカサス後期旧石器時代の様相: グルジア、パラヴァニ遺跡の発掘」『日本西アジア考古学会第19回総会・大会』2014年6月15日、鎌倉女子大学大船キャンパス

〔図書〕(計1件)

1. B. Gasparyan and M. Arimura (eds.), *Stone Age of Armenia*. Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University, 2014, 369p.

6 . 研究組織

( 1 ) 研究代表者

有村 誠 ( ARIMURA, Makoto )

東海大学・文学部・准教授

研究者番号： 26370894